洗足学園音楽大学大学院

管楽器コンチェルト研究演奏会

2021年10月31日(日)開演 14:30 (開場 14:00)
洗足学園 シルバーマウンテン1F
主催：洗足学園音楽大学・大学院

指揮：時任 康文 (本学講師)

独奏：丸山 奈央　大学院1年(ユーフォニアム)
村松 紀親　大学院1年(フルート)
XIAO QIANYI　大学院2年(サクソフォン)
河村 真歩　大学院1年(オーボエ)

⚠新型コロナウィルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い
・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
・大声や対面での会話はお控えください。
・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございます。

Greeting

本日は大学院「管楽器コンチェルト研究演奏会」にご来場頂き、誠にありがとうございました。

本学大学院研究科管楽器コースでは毎年厳しいオーディションによって、コンチェルトの夕べを本学大学院室内管弦楽団と共演する機会を与えられております。その他に「室内楽」「リサイタルシリーズ」など演奏会も数多く行っており、充実した研究を行う環境が整っております。

本日は「コンチェルト研究」として複数台の電子オルガンが、オーケストラの伴奏部を受け持ち、ユーフォニアム・フルート・サクソフォン・オーボエ独奏者が研究演奏を披露いたします。コロナ禍での開催で関係者のみの入場となりましたが、それぞれの楽器の音色や特徴を身近に感じていただければ幸いです。

今後世界に羽ばたく若者に大きな拍手を送ってください。

洗足学園音楽大学・大学院教授
渡部　亨

Program

F.ダヴィッド／トロンボーンのためのコンチェルティーノ
Ferdinand David (1810-73) // Trombone Concertino

ユーフォニアム独奏	丸山 奈央
電子オルガン	WANG QINGZI *(院2)・DENG RUOHENG(院2)・LI MULAN(院2)

尾高 尚忠(1911-51) ／ フルート協奏曲 OP.30b

フルート独奏	村松 紀親
電子オルガン	内海 菜々美*(学3)・WANG QINGZI(院2)・WEI JIACHEN(院1)・GUAN QI(院1)

Intermission

R.シュトラウス／オーボエ協奏曲ニ長調
Richard Strauss (1864-1949) // Konzert D-dur für Oboe und kleines Orchester

オーボエ独奏	河村 真歩
電子オルガン	DU DANYANG *(院2)・WANG WENHAO(院2)・ZHOU SHAOHUI(院2)・堀田 真菜(学3)

A.ウェニャン ／ ラプソディー
Andre Waignein (1942-2015) // Rhapsody

サクソフォン独奏	XIAO QIANYI
電子オルガン	JIN TINGYAN *(院2)・YAN YANGBING(院2)・XU HUAMIN(院2)

＊コンサートマスター

Program Note

F.ダヴィッド／トロンボーンのためのコンチェルティーノ
Ferdinand David (1810-73) // Trombone Concertino

フェルディナンド・ダヴィッドは、ドイツで生まれた。ダヴィッドは優れたヴァイオリン奏者であり、15歳から本格的に演奏活動を行っていた。そしてその翌年にメンデルゾーンとの親交が始まり、その親交が演奏家から音楽家へと変わる大きなきっかけとなった。ダヴィッドは40曲ほどの作曲も手掛け、交響曲や、ヴァイオリン協奏曲なども作曲している。また管楽器の協奏曲作品で、トロンボーン協奏曲の他にファゴット協奏曲も手掛けている。

今回演奏するトロンボーン協奏曲は、1836年ゲヴァントハウス管弦楽団の指揮者を当時務めていたメンデルゾーンの推薦でダヴィッドが同管弦楽団のコンサート・マスターに就任した翌年に完成させた。初演は、R.シューマンから「トロンボーンの神」と言われていた同管弦楽団のバストロンボーン奏者、K.T.クヴァイザーのソロで行われた。

この協奏曲はトロンボーンの4大協奏曲の一つとなっているが、その中でもドイツのオーケストラのオーディションで、ほぼ必ず取り上げられていることから、日本でも試験や、コンクールなどでよく演奏されている。曲の形式はA→B→A´の3部形式となっている。一楽章はソロトロンボーンの中間部の滑らかな旋律が前奏で演奏される。そこへffでトロンボーンが印象強く軽快な旋律を奏でる。二楽章は「葬送行進曲」と楽章名がつけられている。ハ短調になり、ゆったりとした旋律へと変わる。三楽章は、一楽章同様に変ホ長調に戻り一楽章とほぼ旋律が変わらないが旋律により高い音域を多く使用し、トロンボーンの力強い音色を表現している。

今回はこれをユーフォニアムで演奏する。

（丸山 奈央）

尾高 尚忠(1911-51) ／ フルート協奏曲 OP.30b

尾高尚忠は日本の作曲家、指揮者である。幼いころから音楽に親しみがあり、1931年にウィーンへ留学。翌年に一時帰国し、その間に「日本組曲」でワインガルトナー賞を受賞。1938年に同校のアウスゲツァイヒネット（卓越賞）を以って卒業し、指揮者として活躍する。1940年に帰国後、作曲家及び日本交響楽団（現在のNHK交響楽団）常任指揮者として活躍、国立音楽大学作曲科教授に就任。

『フルート協奏曲』は、当時フルート奏者だった森正(1921-1987)の依頼を受けて作曲、1948年に小編成オーケストラ版（作品30a）を森正の独奏、作曲者の指揮により初演された。1950年終わり頃に大編成オーケストラ版へ改訂するが指揮活動や酷い頭痛に悩まされ、思うように作業がはかどらずに最終ページの数小節を残して1951年2月16日に他界した。その後弟子の林光により補筆完成され、1951年3月5日に大編成オーケストラ版（作品30b）を「尾高尚忠追悼演奏会」にて吉田雅夫の独奏、山田和男の指揮、日本交響楽団により初演された。

第1楽章　allegro con spirito

日本の代表的な音階である「五音階（ペンタトニック・スケール）」を多く用いられており、リズム や曲想を変化させて終結部へ向かっていく。

第2楽章　Lento

東洋を感じさせる音楽となっており、日本的な情緒が横溢していて美しい音楽となっている。途中にフルートのカデンツァを挟んで静かに終結していく。

第3楽章　molto vivace

フルートが無窮動風の主題を演奏し、変拍子の主題がフルートに現れる。無窮動、変拍子の順に再現され、最後に第1楽章冒頭の主題が登場し華やかに終結する。

（村松 紀親）

R.シュトラウス／オーボエ協奏曲ニ長調
Richard Strauss (1864-1949) // Konzert D-dur für Oboe und kleines Orchester

リヒャルト・シュトラウスはドイツの作曲家・指揮者で、特に管弦楽やオペラで素晴らしい作品を残した。

オーボエ協奏曲ニ長調は1945年、フィラデルフィア管弦楽団のオーボエ奏者、ジョン・ド・ランシーによって提案された。最初はその提案を撥ねつけたが、オーボエ協奏曲を書くというアイデアはシュトラウスの中にしっかりと残ったようで、同年に完成された。

シュトラウス自身もこの作品をとても美しいオーボエ協奏曲と呼んでいて、美しい旋律と穏やかさに溢れており、老境にあったシュトラウスが、昔を懐かしむかのような寂しさも感じられる。

この曲は3つの楽章から成るが、全楽章アタッカで切れ目なく演奏される。第1楽章はソナタ形で、装飾された第1主題とゆったりとした第2主題からできている。リート形式の第2楽章は変ロ長調で、ゆったりとオーボエが歌い、激しいカデンツァを経て第3楽章に移り変わる。急速なスケルツォから突如として歌い上げるような調子になるなど、色々な表情のある楽章である。

最後には第1楽章の動機が回想される。

（河村 真歩）

A.ウェニャン ／ ラプソディー
Andre Waignein (1942-2015) // Rhapsody

アンドレ・ウェニャンはベルギーの作曲家、指揮者である。この「ラプソディー」は2010年にベルギーで開催される第5回アドルフ・サックス国際コンクールのために、「アルト・サクソフォンとオーケストラまたはピアノのためのラプソディー」として作曲された。この作品はサクソフォンの技術の多様性と華麗性を深く追求し、より明晰に表現するよう工夫されている

全曲は3つの楽章から成る。第1楽章は10個以上の素材を使用しており、演奏者の各方面の技術が強く要求され、試金石となる楽章である。第2楽章は豊かな旋律変化で華麗性と音楽性を表している。第3楽章はテンポが非常に速く、前の楽章の静けさとは著しく対比する。全曲を通して作曲家の叡智を見せつけ、技術も音楽性も楽しめる作品である。

（XIAO QIANYI）

Profile

指揮 /時任康文　Yasufumi TOKITO

武蔵野音楽大学器楽科卒業後、東京音楽大学指揮科に学ぶ。指揮を紙谷一衛、汐澤安彦両氏に師事。在学中より二期会、日生劇場を中心に音楽スタッフとして小澤征爾氏、秋山和慶氏、若杉弘氏、佐藤功太郎氏等のアシスタントを務めた。
1990年「東京の夏」音楽祭に於いて、カールマン作曲オペレッタ「チャールダッシュの女王」を指揮してデビュー。その後、数々のオペラ団体と共に、オペラの主な作品を指揮する。またオーケストラへの客演も多く、東京交響楽団、東京フィルハーモニー、日本フィルハーモニー、新日本フィルハーモニー、東京シティ・フィル・ハーモニック、名古屋フィルハーモニー、神奈川フィルハーモニー等を指揮し好評を博す。
1996年度文化庁派遣芸術家在外研修員として渡伊。ネッロ・サンティ氏のアシスタントとして、チューリッヒ歌劇場、メトロポリタン歌劇場等に同行し研鑽を積んだ。
2001年には、ウズベキスタン・カザフスタンに於いて、故團伊玖磨氏の意志を引き継ぎオペラ「夕鶴」を指揮。新国立劇場小劇場シリーズでカール・オルフ作曲「賢い女」を指揮し好評を博す。東京オペラプロデュース公演にてＶ．ウイリアムス作曲オペラ「恋するサー・ジョン」の本邦初演を指揮。その後の本邦初演作品オペラはマルシュナー作曲「ヴァンパイア」、シャンパルティエ作曲「ルイーズ」、ジョルダーノ作曲「マダム・サンジェーヌ」、アルファーノ作曲「シラノ・ドゥ・ベルジュラック」、ジョルダーノ作曲「戯れ言の饗宴」、レスピーギ作曲「ベルファゴール」等の指揮し、オペラ指揮者としての存在感を大いに印象付けた。
吹奏楽とも関わりが深く、東京の乗泉寺吹奏楽団の常任指揮者を8年間務め全日本吹奏楽コンクールに5年連続出場、3年連続金賞受賞した。近年では、東京佼成ウインド・オーケストラ、東京吹奏楽団、大阪市音楽団、シエナ・ウインド・オーケストラ、フィルハーモニック・ウインズ大阪、ヴィヴィッド・ブラス・トーキョウ、広島ウインド・オーケストラ等、プロフェッショナルな団体に度々客演指揮している。2001年度には吹奏楽コンクール課題曲参考演奏を東京佼成ウインド・オーケストラと共に録音。又､スタジオミュージシャンを中心に集めた大江戸ウインド・オーケストラでは吹奏楽の新しい可能性を追求している。近年では、フィルハーモニック・ウインズ大阪と共に吹奏楽コンクール課題曲を、課題曲という枠にとらわれず独自の解釈を取り込み2011年より今年度までCD&DVDをリリース。好評発売中。
洗足学園音楽大学講師。武蔵野音楽大学講師。昭和音楽大学講師。
また現在、劇団四季のミュージカル「アナと雪の女王」の指揮も担当している。

ユーフォニアム独奏 /丸山 奈央 （院1年）

石川県出身。洗足学園音楽大学卒業。ユーフォニアムを佐藤 信之氏に師事。室内楽を渡邉 功、小田桐 寛之の各氏に師事。

フルート独奏 /村松 紀親 （院1年）

静岡県出身。11歳よりフルートを始める。洗足学園音楽大学管楽器コースを卒業。これまでにフルートを上田恭子、菅原潤、渡部亨、室内楽を辻功、山根公男、松本健司の各氏に師事。日本フルート協会主催第48回フルートデビューリサイタルに出演。現在、中学校や高等学校で音楽指導を行っている。また、幼稚園や老人ホーム、病院などで演奏活動を行っている。

オーボエ独奏 /河村 真歩 （院1年）

愛知県出身。愛知県立明和高等学校音楽科卒業。洗足学園音楽大学音楽学部管楽器コースを首席で卒業。2012年第24回中日管楽器個人・重奏コンテスト第１位・豊田市長賞、2013年第15回日本ジュニア管打楽器コンクール金賞・文部科学大臣賞、2013年第14回大阪国際音楽コンクール第３位、2014年第６回岐阜国際音楽祭コンクール第１位、2016年第18回日本ジュニア管打楽器コンクール銀賞、2018年第１回日本奏楽コンクール第２位、2019年SAKURA JAPAN MUSIC COMPETITION 2019 第１位・グランプリ。 NHK名古屋青少年交響楽団、新交響楽団、Virtuoso Youth Orchestra、読売日本交響楽団などで演奏。オーボエを寺島陽介、鈴木宏子、宮村和宏、辻功各氏に師事。室内楽を松本健司、辻功両氏に師事。

サクソフォン独奏 / XIAO QIANYI （院2年）

1990年上海で生まれ、11歳からサクソフォーンの勉強を始める。2008年上海音楽学院管楽器専攻入学し、洪竟立教授に師事。2012年卒業、学士学位。卒業後上海軽音楽団に入団し、演奏員を務めた。2018年クロアチア世界サックス大会に参加し、好評を受けた。また、長年にわたり合奏の研究および実践を続いている。現在、サクソフォンを池上政人、松下洋各氏に師事している。

指導教員　赤塚 博美　新井 秀昇　岩本 伸一
佐藤 亮一　渡部 亨
協力　電子オルガンオフィス
音響　能藤 伸
AC　岩岡 一志